会　議　録

会　議　名	平成３０年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事　務　局	市民部　コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開　催　日　時	平成３０年２月１３日（火）１８時３０分～１９時３０分		
開　催　場　所	市立はけの森美術館　多目的講義室		
出　席　委　員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 上原佐世子委員 川﨑京子委員 小林正隆委員 鈴木遵矢委員		
欠　席　委　員	なし		
事　務　局　員	薩摩学芸顧問 コミュニティ文化課文化推進係　　吉川、永井 　同　　はけの森美術館学芸員　鈴木、中村		
傍　聴　の　可　否	可		
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由		傍聴者数	０人
会　議　次　第	（１）展覧会「南方より伊東深水から一市川市所蔵『南方風俗スケッチ』観覧 （２）事業実施報告等 （３）意見交換等 （４）その他　次回日程調整等		
会　議　結　果	別紙のとおり		
会　議　要　旨	別紙のとおり		
提　出　資　料	（１）開催した展覧会・ワークシップ等及び今後の予定 （２）意見交換等 （３）その他　任期満了に伴う運営協議会委員改選について		

平成２９年度　第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会

平成３０年２月１３日（火）

【鉄矢会長】　　定刻になりましたので、平成２９年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。

　では、配付資料の確認を、事務局のほうからしていただけますか。

【事務局】　　はい。では、事務局から、配付資料の説明をいたします。まず「平成３０年度第４回小金井市立はけの森美術館運営協議会」と書かれた次第が１枚、それから、資料１、資料２、資料３、そして前回の会議録校正のご案内です。

【鈴木学芸員】　　現在、作品をお貸ししている福岡県立美術館で開催の展覧会のチラシと、招待券です。また、前回の児島善三郎展のカタログですが、遅くなってしまったのですが、ごらんいただければ幸いです。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。

　では、事業実施報告等ということで、始めたいと思います。（１）開催した展覧会・ワークショップ等について、事務局から説明をお願いいたします。

【鈴木学芸員】　　資料１をごらんいただきたいんですけれども、開催した展覧会・ワークショップ等、展覧会といたしましては、前回の運営協議会の際にごらんいただきました「武蔵野の四季と共生　児島善三郎の国分寺時代」が１２月１７日まで開催されました。この展覧会は、兒嶋画廊と府中市美術館の特別協力をいただきまして、観覧者数が最終的に大人が１,０６６人、子供が５７９人で、計１,６４５人になりました。この展覧会の関連企画といたしましては、ギャラリートークを行いました。１１月１８日の土曜日と１２月２日の土曜日に２回行いまして、１回目は参加者が２人、２回目は参加者が１１人でした。１回目に関しては、参加者の方は２人でしたが、逆に細かいお話などもすることができたなと思っています。

【事務局】　　（スライドを上映）こちらが１回目のギャラリートークのときの様子になります。

【鈴木学芸員】　　ちょっと親密なムードでしたけれども、３人で気軽にお話をすることができたという意味ではおもしろい発見もございました。

【事務局】　　（スライドを上映）２回目はこちらになります。

【鈴木学芸員】　　２回目は１１人でしたので、前回のような親密な感じとは大分異なりますけれども、いろいろ質問などもあり、ご来場された皆さんと話し合うという形になりましたので、充実したトークになったのではないかと考えています。

続きまして、2番目のイベントとしましては、「児島善三郎ゆかりの武蔵野を散策しよう」という、ウォーキングイベントを行いました。こちらは、兒嶋画廊さんからご提供いただいた地図ですが、そこには今回の展覧会で展示した作品が実際にどの場所から見て描かれたのかということがわかるようなマップになっていまして、このマップを手がかりに児島善三郎の実際に描いた風景や場所、また、児島善三郎がアトリエを構えていたところ―現在は兒嶋画廊さんになっています―を訪れるとともに、国分寺や小金井の自然を楽しみ、最終的にはけの森美術館まで散策するという内容でした。このときは、美術館関係者も含め、参加者は合計は１８人でした。13 時から 17 時までのイベントで、実際には大体３時間４０分ぐらい歩きました。当日は朝大雨が降ったんですが、午後は快晴になりまして、ちょうど紅葉なども見ることができ、風景も楽しみつつ皆さんとお話しながら散歩を行いました。スライドは野川におけるガイドの説明の様子です。美術館にたどり着いて付属喫茶棟でお茶を飲んでいただいた後、美術館の展示も見ていただきました。とても楽しかった、また、実際にこういったところで描いていたということは知らなかった、というお声もいただきました。とても充実した意義深いイベントであったと考えています。

続きまして３つ目のイベントとしましては、鑑賞＋創作プログラム「○△で何できる？ながーい紙にポンポンポンッ！」を、えほんとあそぶアートのおうちのご協力をいただき、行いました。児島善三郎は対象を丸や三角などといった形で簡略化して描くということが特徴として挙げられます。実際に児島善三郎の風景画を展示室で見て、丸とか三角などが作品のどのようなところにあるのかということを見つけ出した上で、形を楽しみながら、スタンプを使って布のトートバッグに丸とか三角で創作するという内容です。スライドは制作の様子で、ちょうど展示室で丸とか三角などのルーペ状の教材を用いて、どこに三角形や丸とか四角形があるだろうかということを探しているところです

定員は１０組を設定しました。しかしながら、同日のほぼ同じ時間帯に、近隣地域の小学校や様々な場所でクリスマスイベントなど子供向けのプログラムが行われていたようです。そういったこともありましたので、集客が伸びなかったということがわかりました。運営協議会の会長・鉄矢先生にもお力添えをいただき広報活動を行いましたが、最終的に大人１人、子供２人の合計で３人の参加となりました。アンケートでは逆に親密な中で充

実したプログラムを行うことができたので楽しかったですというお声をいただきました。今後は同時期の他のイベントにより注意を払ってイベントの日時を決めたい、と考えています。

次に２番目としまして教育普及事業を行いました。１番目の鑑賞教室は、この児島善三郎展のときに開催しましたが、１１月１７日から１２月１５日まで第一小学校であるとか緑小、前原、本町小、第三小、第二小学校も皆さんに来ていただきまして、展示室で鑑賞教室を行いました。生徒さんもすごく熱心に作品を見てくださいましたし、貴重なおもしろい意見も伺うこともできたので、やはり鑑賞教室を行うことは大変意味があると思われます。

また、前回の運営協議会でもお話をさせていただいたと思うんですけれども、職場体験学習が３日間行われました。このときは、小金井市立東中学校の２年生の男子生徒４人が来てくださいました。ちょうど児島善三郎展を開催したものですから、1 日目は監視をしたり、また受付のチケットもぎりの体験が１日目でした。２日目は、附属喫茶棟で体験していただき、コーヒーを実際に入れてみたり、注文をとるなどの接客業務をしていただきました。3 日目は美術館で作品の調書をとる、また作品のディスクリプションを行うといった体験を行いました。ですので、１日目の美術館の接客業務、2 日目の付属喫茶等の接客業務、３日目の学芸業務を行いましたので、生徒の方々もかなりおもしろい体験ができたという印象を受けました。

３つ目としましては、附属喫茶棟の「musashino はけの森カフェ」と相互利用サービスを、児島善三郎展でも行いました。ちょうど児島善三郎の風景画をイメージした特別メニューを提供していただきました。そして、喫茶棟の利用時に美術館の半券を提示しましてこの特別メニューを注文すると代金の割引を適用いたしました。また、美術館では喫茶棟の利用レシートを示すとポストカード１枚をプレゼントという形で、相互の利用を促進するという内容です。実際の利用者は、喫茶棟では１１月には４人、１２月には７人、計延べ１１人の利用になりました。また、美術館では、喫茶棟のレシートの提示を行った人ということですが、１１月は５人、１２月３人、計延べ８人の利用になりました。このような試みは伊東深水の展覧会から行いましたけれども、今後の喫茶棟と当館との活動を鑑みても、今後も継続してサービスを行うべきと思われます。

そのほか、４番目ですけれども、現在、作品貸し出しを行っています。ちょうどお手元にありますチラシがそうですが、「没後５０年　中村研一展」が福岡県立美術館で開催して

おります。この後、新居浜市美術館のほうにも巡回すします。貸し出しをしている作品ですけれども、中村研一の「フランス婦人像」、また「シンガポールへの道」など、油彩１３点、陶器が３点、素描約１１点で、遺品は２点ですので、大体２９点の作品などをお貸ししています。

開催した展覧会・ワークショップ等は以上になります。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。

では、質問、ご意見等ありましたらお願いいたします。

【薩摩学芸顧問】　　私が質問するのも変かもしれませんが、この職場体験学習は３日というのは、もう学校のほうで決めているのですか。

【鈴木学芸員】　　そうですね。中学から３日で行いたいという話がありました。

【中村学芸員】　　学年の生徒全体がこの３日間に集中して各場所に行って、もう日程も決まっています。

【薩摩学芸顧問】　　いろいろなところに行くんだよね。

美術館だけ考えたら、もう少しあるといろいろなことができるんですけれどね。まあ、しかたがないね。

【鈴木学芸員】　　実は他の中学校からも体験学習を行いたいという話もありましたが、ご希望の日程が閉館時期の１月ということだったので、見送られることになりました。

【鉄矢会長】　　まだ中学校の先生方も、職業体験という名前が言っているように、職業を見せたがっている、職業を紹介してくださいというのが多いんだと思うんですけれど、多分、それよりももう少し、一歩進んで、どんな能力がこの職業に必要なのかというのと、その能力をどういうふうに鍛えてきたんだよというのを教えてあげると、中学生が、これから自分はこういう能力を欲しいからこういう勉強をしようとかになるんだろうなと思って、そこが今、大学のほうではキャリア教育の見直しというか、今、言われていますね。どんどん職業がなくなると言われて、こういうときにどういうふうに希望を与えるのか、将来の選択をやるかというのがその辺かなというのを、意見としてお伝えしておきます。

【鈴木学芸員】　　ただ、当館の職場体験をする中学生に関しては、比較的美術には関心があって、何らかの形で美術館などに携わりたいとか、美術館の学芸員の仕事に興味があるということもあって参加される方が多いというのはあるかと思うんです。実際に作品を扱うなど初めての経験も多く、刺激的な内容であったようです。

【中村学芸員】　　今回、あえて一回喫茶棟のほうに職場体験で出てもらうというふうに

しているのは、やはり美術館に来るときに、美術に興味があるんだけれども、具体的に、では美術館でどういう仕事をしているのかということに関しては、いまいちぴんとこないという状態で来ている中学生もいるんですね。美術館の中で学芸員がやっている仕事というものを具体的にイメージできるようになるというだけではなくて、美術館というものに携わる、いろいろな人たちがいて、中には、例えば喫茶棟みたいに接客みたいなことをやっているところもあるということを体験してほしいというのがありました。今回は、せっかく開館中の職場体験ということにもなりましたので、美術館の中で学芸員の仕事というのを体験してもらったりするだけではなくて、喫茶棟のほうで少し喫茶棟の業務を味わってもらうというか、体験してもらうということも、ちょっとチャレンジとして入れてみているところがあります。

【鉄矢会長】　いいと思います。学芸員という、だれだかわからない学芸員じゃなくて、あなたに会ってわかったという程度でいいと思うんです。漠然としなくていいと思うんで、ぜひいろいろやってください。

【山村委員】　質問で、ほんとうに聞くだけなんですけれど、展覧会の１,６４５人、合わせて何日間で、１日何人になるか事務局に聞いていいですか。すごい端的な質問なんですけれど。

【中村学芸員】　今、ちょっと、私、数えます。

【山村委員】　では、次の質問で、ギャラリートークの１１月１８日土曜日が参加者２人だったということで、あとのワークショップのほうはクリスマスイベントが多かったと聞いたんですけれど、このときは何か理由があったんですか。

【鈴木学芸員】　この日は、実は前後でお客様がかなり多かったんですけれども、トークの２時から２時半の間になったとたんに人がはけてしまいました。この日に人が少なかったというわけではないんですけれども、たまたまそのような形になったということがあります。

【山村委員】　ここで少なかった理由はちょっと不明と。

【鈴木学芸員】　特段天候が悪かったわけではなく、午前中にはそれなりの数のお客様もいて、２時半以降、3 時以降にはお客様もいらっしゃったのですが、どういうわけか 2 人になってしまったのですね。ちょっと私もその辺がまだ分析不足なんですけれども。

【山村委員】　わかりました。

【中村学芸員】　日数ですけれど、今、ざっとの計算で４１日間開催で、１日平均すると

２６人という形になります。ただ、ちょっと補足をしておきますと、この子供５７９人というのは鑑賞教室で来館した子供を含んでいます。そうすると鑑賞教室があった日に大体１００人単位で来ているという形になりますので、平均する値からは実態としては少しずれた形できているというところがあります。

【山村委員】　　わかりました。

　それから、ウォーキングイベントのところなんですけれど、美術館関係者というのは、差し支えない範囲で、どういう人が……。

【鈴木学芸員】　　美術関係者というのは、私と、あと事務の、ここのスタッフですね。ここの美術館スタッフなので、美術館関係者４人ということです。

【山村委員】　　誤解していました。スタッフですね。

【鈴木学芸員】　　スタッフです。

【山村委員】　　わかりました。

　それから、最後のはけの森カフェとの相互利用サービスの特別メニューと割引なんですけれど、どんな特別メニューで、割引はどれぐらいだったのですか。

【鈴木学芸員】　　今回メニューの写真をちゃんと用意しなかったので恐縮なんですが、児島善三郎の特徴である丸とか三角とか四角とかをイメージしたケーキといったお菓子が……。

【山村委員】　　形が丸、三角。

【鈴木学芸員】　　そうですね、そういったちょっとかわいらしいお菓子の特別メニューがありまして、児島善三郎の風景画より、プティフルールの盛り合わせというようなタイトルだったと思うんですけれども、特別メニューで、当館の半券を出すと５０円引きということでした。

【山村委員】　　はい、ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　今、私、このギャラリートーク２人というのと、その後のイベントもというのがあって、土曜日のこの時間って親子で動いたら１日つぶれる日だよなと思うんです。これだと土曜日が。でも、子供は動きたいとか思うとここには来ない、体を運動させたいと思う親は来ないような気がするので、何かもうちょっとずらすほうがあり得るかなという気も、ちょっと実験するのにどうなのか、あと、インタビューも来た人とか、この間も私、ジャコメッティ展に行ったときは、もう目的を持って行ったので、あれはどこだっけ、九州で見たのかな、何か、違うな、どこかで見たときも目的を持って行ったので、

朝一番に近くで行って、それで、そこでギャラリートークあったから、あ、ラッキーと思って見れたというのがあって、その後、また午後何とかしようと思っていると、何か午前と午後というのは１日２つのことができると思うと、ここをぐっとつかまると動けないようなのかなという気が、どういうふうに分析するかわからないですけれど、個人的な感想の意見。

【薩摩学芸顧問】　　２回やるんだったら、時間帯をずらす手もあるかもしれない。１回目は午前中にとか。そうすると、午前中に来たい人はそっちに来るし。

【鈴木学芸員】　　そうですね。慣例的にこのような時間帯になっていましたけれども、時間帯を変えるのは考えなくては、と思っています。

【鉄矢会長】　　川﨑委員、どう思われますか、お子さんと。

【川﨑委員】　　私、今、それについて言いたかったんですけれど、ワークショップ、１２月９日の１組というのがやっぱり。告知は……。

【鈴木学芸員】　　したんですね。しまして、チラシもかなり配布したんですが。

【川﨑委員】　　幼稚園に配ったりもしていますか。

【鈴木学芸員】　　幼稚園とか、あと学校とか、そういうところにも配布し、図書館などの施設にも配布したのですけれども、ちょうど同日に多くの地域で同じような子供向けのプログラムがあったようです。また、１２月という時期も盲点だったのかと思っています。風邪を引いて、当日キャンセルの方がいらしたので、風邪やインフルエンザなどが少なく、さらに時期的にも年末を避け、11 月にイベント日時も組まないといけないのかな、と思います。同じような日に子供向けのプログラムがどれぐらいあるのか、ということもなかなか把握できない部分もありますので、そのあたりも今後の課題と思っています。

【鉄矢会長】　　調べなくていいですよ。こっちがおもしろそうに見せれば。

【鈴木学芸員】　　そうですね。それが一番だと思いますけれどね。

【中村学芸員】　　横から補足しますと、実はキャンセルをしたおうちというのは、複数兄弟で参加するはずだったんですね。そうしたら、おうちの中で、たしかインフルエンザというふうに聞いていますけれども、インフルエンザがはやって、参加するはずだった兄弟が風邪を引いてしまった。親のほうも風邪を引いている子供を１人残して出るわけにいかないので、家族全体でキャンセルをするという状態になってしまったので、やはり家族連れで来る、保護者が同伴するということが基本的には前提になっているようなイベントというものだと、そういうふうに１家族分で結構ごそっと抜けてしまうということがどう

しても起こり得ます。そこに関しては、今後少しそういうことが起こり得るということを念頭にした上で、内容を組んでいく必要があるのかなというところはあります。

【川﨑委員】　幼稚園に告知されたという話なんですけれど、大体何かあると掲示板に幼稚園って出たりして、みんなまじまじとすごいよく見るんですね、掲示板って。こんなおもしろそうなイベントあるんだというので、市内で行われるイベントとかよくあるんですけれど、はけの森美術館のは張り出されていなかったような気がして。

【鈴木学芸員】　保育園が中心でしたので。

【川﨑委員】　じゃ、ぜひ幼稚園に。

【鈴木学芸員】　今後は幼稚園とかへの配布も考えます。

【川﨑委員】　あとは、個人的に自分で見つけたそういうイベントも、例えば私が園長とか園の事務の方に相談して、張り出してもいいですかと言うと、張り出させてもらえることもあるので、美術館のほうから直接告知を送っていただければ張り出されるとは思うんですけれど。

【鈴木学芸員】　ありがとうございます。

【川﨑委員】　私も、幼稚園的にはこの土曜日の午後ってもう行きたい時間帯なので、参加したい時間帯なので、もうちょっと幼稚園のほうとか、あと、そうですね、告知の範囲を広げていただくと、もうちょっと参加者数も増えて、冬なので、室内のこういうワークショップとか、寒い時期って外でなかなか長い時間遊べないと思うので、室内のこういうイベントって割と皆さん行きたがっている方が多い時期だと思うので。

【山村委員】　需要はあると思いますけれどね。

【川﨑委員】　風邪はもうはやっているとは思うんですけれど。

【鈴木学芸員】　やはり子供向けのイベントが、隣接地域において、まさに同じ日に多かったみたいなんですね

【山村委員】　赤ちゃん連れで行ってもいいんだよね。

【鈴木学芸員】　はい、そうです。

【山村委員】　ベビーカー、赤ちゃん連れオーケーとか、何かアピールするといいと思います。

【川﨑委員】　すごい楽しそうなイベントだった……。

【鈴木学芸員】　もうちょっとキャッチーなアピールの仕方を少し考えなければなと思っています。

【上原委員】　今、お話を聞いていて思ったんですけれども、市からのお知らせとか、そういう掲示板、ありますよね。やはり市内の方が行くことが多いと思うので、結構いろいろなところにたくさんの掲示板があるので、私はよく掲示板を見ます、何かおもしろいのないかなって。そういう市報もありがたいけれど、掲示板の活用、ちょっと面倒かもしれませんが……。

【事務局】　掲示板は、３カ月前からの予約で、そこで事業内容が決まっていないと張れないんですね。かなり激戦なので、広報掲示板に張る枚数が決まっていて、市の後援しているものも全部張らなくてはいけないので、ちょっと難しいかなという気がします。

【山村委員】　あと、府中市だと、市のメーリングリストがあって、お母さん方が５千人、１万人とか登録してあって、流すと、結構食いつきがいいというか、そういうシステムがあるんですけれど、小金井の場合はそういうのはないですか。

【鉄矢会長】　小金井にのびのびーのがありますよね。

【鈴木委員（館長）】　ホームページ。

【鉄矢会長】　子育てのホームページ。

【鈴木学芸員】　何か、自由投稿とかできる。

【鈴木委員（館長）】　いや、それはホームページです。

【鉄矢会長】　市のホームページですね。

【鈴木委員（館長）】　あれは市だったのか。ちょっと済みません。所管外なのでわからないんですけれど。今、保育園、幼稚園の話……。

【鉄矢会長】　を一括して出している、子育てに関して一括で出しているサイトのスタートページがのびのびーのっていう。

【鈴木委員（館長）】　そこは多分、子育て支援課が絡んでいると思いますので、そことちょっと調整して、うまいこと宣伝できないかというのを考えてみたいと思います。

【川﨑委員】　あと、家庭支援センターのゆりかごという子供を遊ばせる室内の施設があるんですけれど、そこも結構市内のイベントがいっぱい常に張られていて、お母さん方がよく見ている感じがあるので、そこももし告知されていなかったら、こういうリーフレットとか送っていただくと張ってもらえるんじゃないかと思います。

【鈴木学芸員】　ありがとうございます。参考にさせていただきます。

【中村学芸員】　そのときは、市の公式ツイッターでご案内を出していまして。ただやはり市の公式ツイッターというものを見て、求めている情報を探す層と、こういうイベン

トの情報を探している層というところの重なりを考えると、そこまでぴったりという形ではなかったのかもしれないですね。

【鈴木学芸員】　　そして鉄矢先生にもいろいろメッセージを発信していただいたんですけれども。

【鉄矢会長】　　いや、僕の場合も多分……。おやじの会みたいのを発信できるといいですね。おれが連れてくよ、きょうはと言ってくれる……。

【山村委員】　　少ないと思う。赤ちゃん連れのお母さんとか０歳から未就学児のお母さん方ってなかなかイベントに行けなくて、特に美術館なんかはまるで行けないことが多いので、キッズデーとかって都美館でたまにやるんですけれど、すごい応募なんですよ。需要はあると思うんですけれどね。そういう人たちに届くような広報手段をうまく、それこそ子育て支援課と連携するとかすると、きっともっと需要はあると思いますけれどね。

【上原委員】　　児童館とかね。

【薩摩学芸顧問】　　いろいろな意見を集約して、こういうのは学芸員だけで考えていてもだめだから、事務のほうも少し。基本的にはまずは小金井市内に宣伝すればいいわけだから。

【鈴木学芸員】　　そうですね。

【薩摩学芸顧問】　　だからそんなに広範囲ではないので。システマチックにできるはずだと思います。送るのがいいのか、持参するのがいいのか。

【鈴木学芸員】　　そうですね。改めて考え直す時だなと思います。

【鉄矢会長】　　持参すると、学芸の森保育園は一発で何か配ってくれそうだね。附属幼稚園だから、張っておきますと言ってくれそうですね。

【山村委員】　　持参するといいですよ。

【鉄矢会長】　　持参する園とか保育園を決めちゃっておけば、四、五園入れるだけで、そこにやるだけで変わるんじゃないですかね。

【上原委員】　　このイベントの対象は子供さんですか。それとも年齢はそんな……。

【鈴木学芸員】　　５歳から小学４年生と保護者です。

【薩摩学芸顧問】　　こういうものを持参するときは、これを持っていきたいから、何月何日の何時に予約なんて、そんなことはやりづらいから、事前に一本電話入れて、ああ、今日は都合悪いですと言われたら行かなければいいので。いきなり行くと、また少し失礼だけれど、一本電話を入れて、ちょっとチラシを出させてくださいって。それで回ったほ

うがいいかもしれない。

【鈴木学芸員】　　そうですね。このえほんとあそぶアートのおうちのイベントは人気のイベントなのですが、今回はこのような結果になってしまったので、皆様のご教示を踏まえて検討していきたいと思います。

【鉄矢会長】　　さっき、赤ちゃん連れも可と言ってたんですけれど、保護者の後ろにおじいちゃん、おばあちゃんも可と書いておくと、保護者ですよね。孫と行っていい。そうすると、一番マーケットが大きいところじゃない、小金井の中で。

【山村委員】　　ウェルカムな姿勢を示す。

【鉄矢会長】　　みんな単にこうやって保護者というと、ああ、親だと思う。

【薩摩学芸顧問】　　そうね。だから保護者と書いて、お父さんもお母さんもおじいさんもおばあさんも。

【鈴木学芸員】　　一応５歳からとはしていますけれども、実際には赤ちゃん連れのお母様もいらしています。もうちょっとそういったことも踏まえていきたいなと思います。

【鉄矢会長】　　では、そのぐらいで、またアイデアがあったら実践して試して。

【鈴木学芸員】　　試してみたいと思います。ありがとうございます。

【鉄矢会長】　　やってみなはれって感じでいきましょうね。

ありがとうございます。

次に（２）今後開催予定の展覧会・ワークショップ等について、お願いします。

【鈴木学芸員】　　今後の展覧会といたしましては、３月２７日から５月１３日にかけて、所蔵作品展「中村研一の制作－日常風景とともに」を企画しております。現在、福岡で開催している「没後 50 年　中村研一展」で主要な作品を多数お貸ししていますが、当館では日常風景ということを切り口に、親密な感じの作品を展示するという構成になります。関連企画としましては、この展覧会においても土曜日の２時から２時半に、４月１４日と５月１２日にギャラリートークを行う予定です。もう一つの企画としましては、親子で楽しむ工作の時間ということで、紙粘土を使って造形を楽しむ、色付けしたりしながら作品を作るという内容のイベントを企画しています。

今後の展覧会・ワークショップ等は以上になります。

【鉄矢会長】　　はい、ありがとうございます。

何か質問、ご意見がありましたらお願いします。ぜひギャラリートーク、さっきもアイデアが出た、時間をずらす。

【鈴木学芸員】　　これは変更できないんですけれども……。

【鉄矢会長】　　変えられないんですか。

【鈴木学芸員】　　今、この形でチラシ印刷に入っていますので。今後の展覧会では日時をずらすということで考えたいと思います。

【鉄矢会長】　　負担なんですよね、ギャラリートークやるのって。というか、サービスタイムじゃないですけれども、サービスタイムで今日は１１時からちょっとやりますって、急にゲリラ的にやってあげて、ギャラリートークは楽しいというふうな人を増やすというのが、もちろんギャラリートークのお仕事じゃないので、お仕事は学芸員それだけじゃないのはわかっているんですけれど、ギャラリートークを聞くと絵がよくわかるとか、その体験を持つことをしていない人がもしここにいっぱいいるんだとすると、ああ、ギャラリートークに行ったほうがおもしろいのかなと思わせるのも、何かほんのちょっとあったりすると。

【鈴木学芸員】　　ただ、ふだんからそのギャラリートーク以外の日とかで、お客様から質問を受けることもあり、その際は学芸員からその都度説明をしたりしています。そしてその説明をしていると、ほかのお客様が私も質問したい、ということもありますので、ふだんからなるべくお客さまの質問にお応えするように心がけています。

【鉄矢会長】　　そのときに、こういうのをギャラリートークというんですよって。

【鈴木学芸員】　そうですね。

【鉄矢会長】　　それがわからないかもしれないですね、だから。もしかして、ギャラリートークと書いてあるけれど、一体何なのかなってわかっていない人も多いのかもしれない。

【鈴木学芸員】　　そうですね。そういったときに、これがギャラリートークなんでみたいに申し上げるようにします。

【薩摩学芸顧問】　　それから、私の若いというか、駆け出しのころにやったんだけれど、人のギャラリートークを聞きに行くのも参考になる。やっぱりうまい人はうまい。どういうことをやるとうまいかとわかっている。私が今まで知っているので最高は、京都大学の大学博物館の古生物学が専門の大野教授。何やらせてもできるのですが、事前に勉強するんでしょうけれども、考古学から何から何まで。それはもう抱腹絶倒のギャラリートークです。　それから、川村記念美術館の前に学芸課長をやっていた広本さんがうまかったですね。見るところをぴしっと教えながら、かつ適当に脱線して、交流したときの裏話とか

ね。

【鉄矢会長】　　そこでしか聞けない話が聞けると。

【薩摩学芸顧問】　　そうそう。

【鉄矢会長】　　得した気分。

【薩摩学芸顧問】　　とても文章にはできない話。そういうのも本気でやるなら。

【山村委員】　　さっきの、ある時間帯は人がたくさんいて、ある時間帯は急にいなくなったということもあるので、例えば、同じ土曜日で１４時からの回と１５時からの回と１６時からの回、３回ぐらいあっても、そんなに大変じゃないっていうか、と思うので、どうですかね。

【鈴木学芸員】　　その時間帯を増やすとか。

【山村委員】　　２回くらいやってもいいような気がするけど。

【鈴木学芸員】　　そうですね。今後の課題として当館の勤務スタッフの人数があまりに少ないということがありますので、その辺も調整できるのであれば、検討していきたいです。

【鉄矢会長】　　一番まずいのが、いなくて、へこんで、自分で負のスパイラルをつくっちゃうのが一番もったいないところですね。

【鈴木学芸員】　　何につけてもスタッフ不足という問題がありますので、一日１回にしているという側面もなきにしもあらずなんですけれども。

【中村学芸員】　　内輪の話をしてしまいますと、監視の方をお願いしているんですけれど、監視の方も休憩をとっているんですね。休憩のときに監視の人をゼロにするわけにいかないので、じゃ、どうするかというと、受付の人が休憩時間中、展示室に入る。そうすると受付が手薄になるから、受付をカバーするのに学芸員が入るという玉突き状態になっています。１５時前後にそういう玉突き状態が起きていて、そのあたりの人員がきつきつになっているという状況があって、非常に難しいというのがあります。

【鈴木学芸】　　その人員が少なすぎるというのが一番の問題点で、要は場合によってエレベーターの誘導を学芸員も行うということが常日頃あるわけです。ですから、従来、展覧会会期中二回、開催するしかなかったわけです。予算も確認して人員調整が可能であれば、今後はギャラリートークの回数を増やす、一日に何回も行うなども考えたいと思います。

【鉄矢会長】　　美術館サポーターが欲しくなりますかね。

【中村学芸員】　　それで、受付に学芸員がいるときに電話が鳴ると、じゃ、電話はだれがとるんだっていうことになってしまって、電話が鳴っているし、受付に人が来ちゃうしという状態になってしまうので、やはりそこの少し何かがあったときの手を考える、だれか一人だけにしてしまうというのは、やっぱりなかなか難しいところがあるんですね。

【鉄矢会長】　　今日、用がある人と、今日、行くところがある人がいっぱいいるらしいですから。

【山村委員】　　土日だけでももう一人ぐらいアルバイトがいてくれるといいかなっていう気がしますけれどね。なかなかサポーターじゃ……。

【鉄矢会長】　　できないですね。その責任がね。

【山村委員】　　臨機応変じゃないとできないね。

【鉄矢会長】　　議事録に残るといいですね。アルバイトが一人入ったらいいなあ。みんなの意見ですかね。

そんな意見が出たところで、ほかに、ご意見、ありますでしょうか。

なければ、次は、意見交換等になります。

先ほどありましたけれど、土日、アルバイトが入ってくれて、もう少しそういう来館者への知的なサービスが、学芸員からの直接のサービスがあったらいいなということが出ましたけれども、ほかにも何か皆さんありましたら。かなりクリエイティビティな、クリエイティブの高いいろいろな話が出ていますけれど。今回、私の意見なんですけれど、福岡県立美術館の中村研一展のチラシに、中村研一記念美術館が東京の小金井にあるよって。

【鈴木学芸員】　　それは書いてもらえませんでした。

【鉄矢会長】　　ね、どっかに書いてあると。

【鈴木学芸員】　　そういうことは福岡県立美術館ご相談してはいたんですけれども、特にそういう表記はなされませんでした。

【山村委員】　　これは出張で行ったんですか。

【鈴木学芸員】　　いえ、まだ行っていません。来月同展覧会が終わるタイミングに合わせて、私も中村学芸員の二人とも、出張で行きます。ちなみに新居浜展では、学芸顧問の薩摩先生がご講演をされて、私もギャラリートークをすることになりますので、こうした情報が少なからず新居浜市展のチラシには掲載されると思います。

【鉄矢会長】　　そういう載せ方ありますね。学芸、トークをやるって、必ずここに、後ろには書きやすいんでしょうね。

【鈴木学芸員】　　残念ながら、何か特別な協力とかそういうような形で当館の名前は出ませんでした。あと当館がお貸ししている作品の図版も、全くチラシに掲載されませんでした。ですけれども、新居浜展のチラシに当館の作品が掲載されるようですので、キャプションとして当館の名前が表記されます。また、関連企画の箇所に学芸顧問の薩摩先生、私の名前も少し出ますから、そのようなかたちで当館の情報が最小限掲載されるとは思いますけれど。

【事務局】　　最初にその話があったときに、広報協力をしましょうということは言ったんですけれども、向こうがこちらの言う意味がとれなかったみたいで。でも、せめて協力、何々美術館は入れるの普通じゃないかなという感じはこちらとしては持っているんですけれども。

【鈴木学芸員】　　点数もかなりちょっと大目には出しているのでと思うところなんですが。

【山村委員】　　何点ぐらい出しているの。

【鈴木学芸員】　　２９点です。

【山村委員】　　じゃ、「特別協力」出していいよね。

【鈴木学芸員】　　そういった配慮はあまりしていただけなかったようですね。

【鉄矢会長】　　それはひどいなと、運営委員会からつつかれましたと言ってください。それは言ってくれてもよかったんじゃないと、運営委員会のほうからくぎ刺されちゃいましたと。

　そのほか、ありますでしょうか。大丈夫ですか。

　では、会議録の校正について事務局からお願いします。

【事務局】　　前回、第３回の会議録の校正について、もし修正などございましたら、３月６日の火曜日までにコミュニティ文化課までご連絡をいただければと思います。

【鉄矢会長】　　会議録については、今の説明どおり、皆様、お願いいたします。

　続いて、運営協議会委員改選についての説明を、館長にお願いします。

【鈴木委員（館長）】　　では、私のほうから。小金井市の市民参加条例という条例がございまして、附属機関、今回のこの運営協議会もそうなんですけれども、附属機関の委員は原則として公募による委員を置かなければならないと定められています。はけの森美術館の条例の中に、この運営審議会の規定があるんですけれども、市民委員はこの条例に基づいて公募により募集するという規定がされています。今回、任期満了を迎えるに当たりま

して、この公募委員を市民委員の皆さんにおかれましては、再度ご応募をご検討いただきたいなというふうに思っています。ぜひよろしくお願いいたします。

【鉄矢会長】　私たちの任期も今年度いっぱいです。

【鈴木委員（館長）】　学識であったり、例えば指導室長とか、私なんかについても、一応任期は２年なんですけれども、例えばこちらについてはあて職で決まっておりますし、学識の先生におかれましては任期２年ですが、継続も可能となってございます。

【山村委員】　継続何年までとかってあるんですか。

【鈴木委員（館長）】　基本的に学識の先生につきましては、専門性を我々は期待してお願いしているところでございますので、特段、現時点で３期以内とか、任期満了ではなく、市長の判断という形になります。

【鉄矢会長】　こういうことなので、皆様から総括としてご意見ほか、ご感想をいただきたいと思います。委員の皆様からお一人ずつお話をいただければと思います。

上原委員。

【上原委員】　２年近くやらせていただきまして、今までと変わったところは、美術館とかよく行くようになって、見る機会もふえました。それと、絵というか、若いときは描いていたんですけれども、ちょっと最近は離れていたのですけれども、近くの友達と一緒に月に１回でも集まって描こうかという話は、実際まだなんですけれど、話はもうできていまして、やっぱりこういうことにかかわりますと、意識が、そういう本を見るとか、自分の中ですごく変わってきて、それがやっぱりお友達を誘ってみるとか、影響は大きいなというのは思います。ですから、私の場合は年いって、高齢者を代表するって大げさですけれど、やっぱりそういう立場で何度もこういう入館料を無料なり、シルバーパスにしてもらいたいとか、そういう感じも言い続けました。

ほんとうにありがとうございました。

【鉄矢会長】　ありがとうございます。

川﨑委員。

【川﨑委員】　私も、この機会を与えていただくまでは、美術館の内情をわからずにいたんですけれど、市立美術館で特にはけの森美術館に関しては、予算がなかなか足りていなくて人員不足でという、２年見ていても現状維持というか余り変われない点がもったいないなと、ほんとうに思うんですけれども、微力ながらちょっとずつ意見も出させていただいて、まだ入館者数にしても展示の内容にしても伸びしろがとてもある美術館だと思い

ますので、これからも何かでお役に立てればいいなと思っています。ありがとうございました。

【鉄矢会長】　　ありがとうございます。

館長、最後にまたお話を。

【小林委員】　　この会に参加させていただきまして、はけの森美術館って私はすばらしいなと思って、実は思いながらここに来るんですけれども、実際の絵に触れて何がわかるかって、そんなに専門的なことはわかりませんけれども、自分の教養を高めることができました。ただ、ここの運営委員会で意見を言うのが非常に難しいところもあったので、お役に立てたかどうかわかりませんが、子供たちが職場体験学習や、それから鑑賞教室で大変お世話になったことにつきましては、また改めまして深い感謝を申し上げる次第です。ありがとうございました。

【山村委員】　　今までにいろいろな議論もあった中で、やっぱり予算がないとか、学芸員が少ないとか、雇用が不安定だとか、いろいろなそういうこともあって、そもそもの最初からそういうことについては改善をお願いするようにというふうに言ってきたんですけれども、なかなか難しいということはよくわかっております。だから、逆に、働いている人間としては自分の実感を込めて言うんですけれど、弱みを強みに生かすというか、こういう小さくて予算がなくて人がいない美術館だからこそできるようなこともあるかなと思っております。逆に大きい美術館って不自由なんですね、すごくね。いろいろなところに縛られて。やっぱりお金のこととか、マスコミとの関係だとか、ひどく官僚的な美術館もあって、逆に小さいところであるからこそ冒険もできるかなということがあるのかなと思う。それは個人の、それぞれの学芸員が持っていらっしゃるイニシアティブというか、モチベーションとかに絡めながら、逆にチャンスだと思ってできることをもっともっとやっていっていただければなという、ある意味、自分のやりたいことをできる余地があるとは思います。個人記念美術館でなくてはならないからこそできることもやっぱりあると思っていまして、中村研一というのは没後、去年で５０年ですけれど、今年は藤田嗣治が没後５０年なんですね。そういう比較というか、そういうことも含めながら時代の証言を語れるというのは個人の美術館、個人だったからこそできることもあると思います。そういう意味でもっと広い視点から見ると、小さい美術館でなくてはならない歴史的使命みたいなものも大げさに言うとあると思っています。いろいろ大変かとほんとうに思いますけれども、今までもちろんよくやっていらっしゃったと思うんですが、もっともっとこの弱みを

強みに生かすような、しかも歴史を残すというか、そういうところで頑張っていただければ必ず見ている人は見ているので、今でも評価されていますけれども、もっと評価されると思いますので、頑張っていただけるようにお願いします。以上です。

【鉄矢会長】　私からも。とても僕はいい美術館だと思っていて、特に、今、山村先生おっしゃられた、小さいからやってほしいというのと、運営委員会のほうの中でもできるだけ気をつけているのは、学芸員が伸び伸びできること、あと、学芸員がやりたいことをちゃんと言えて、それが運営協議会の中でいいねと言えるようになるほうがいいんだと思っています。中村研一記念美術館という名前ですけれども、一方で、学芸員さんが年度で決まっていたり、何年以上働けないということになってくると、その中でこの美術館の中でできることっていうのは、少しこじつけであってもやりたいことがあったらやってもいいかなというぐらいに私は思っています。でも、そのこじつけが実は新しい化学反応も生みそうな気もするので、ぜひぜひやっていただきたいなと思っています。

あとはやっぱり、本当に学芸員もう１名とか、非常勤じゃなくて常勤をというのは相変わらず思い続けているし、訴え続けたいと思っています。その一方で、最近、働き方改革というのを、やっぱり大学の中でも言われていて、特に女性の働き方で、働きたいか子育てしたいかの両極端しかいないと。子育てしたい人は働かないというジャッジにするし、働きたいという人は保育園に全部預けなきゃいけない。それがおかしいなという話をしていて、働きたい、子育てもしたいという人が両方できること、だから、半日は本気で働いて、半日子育てできるとか、何かそういうような仕組みで社会が支えられたりするといいのかなと思って、もしかしたらこの美術館の中で、人はいないと言っているけれども、アルバイトで来る人もどこまで信頼できるかというんだったら、半分はちゃんとしたところの非常勤の扱いだけれど、半分はほんとうにアルバイトみたいな扱いとかいうのを少しずつふやして、何か層の厚い選手層を持ったほうが一つはありかなと思って、それこそ地域に根差した美術館でできるかななんていうのもちょっと考えたりもしております。考えるしか能がないんですけれども、いろいろありがとうございました。

【鈴木委員（館長）】　では、最後に私のほうから。去年の４月に初めてこの分野の仕事をすることになって、全く素人で右も左もわからない中、職員、それから皆さんに支えられて何とかもうすぐ１年ですけれど、やってくることができました。昭和６２年に役所に入って、今まで９箇所移動し、新しい、全て違う課、動いてきたんですけれども、この職場はある意味、なかなかおもしろいなと思える職場だなというふうに思って過ごしてきま

した。もうすぐ１年ですけれど、課題もよく見えてきたなという気もしていますし、委員の皆さんからご指摘いただいた内容はまさしくそのとおりだなというふうに思います。ただ、人をふやせますかとか、予算を倍増しますとか、なかなかそういうのもできないというのが、今の小金井市の実情でもあります。会長、それから副会長のほうから、小さい美術館なりのやり方、あるいは逆に自由度が高く、やりたいことができるんじゃないかというようなご提言もいただきました。来年、多分まだいると思いますので、そういったアドバイスを受けて、我々、どんな工夫で美術館の伸びしろをさらに伸ばしていけるかというのは検討していきたいというふうに思います。ありがとうございました。

【鉄矢会長】　平成３０年度第１回目の運営協議会は、次期市民委員が決まりましたら、事務局より日程調整させていただくということでよろしいでしょうか。

以上で、はけの森美術館運営協議会を終了いたします。

ありがとうございました。

―― 了 ―